

地球環境との共生——仏教における環境教育

山本修一

はじめに

近年、世界においては、テロリズムに象徴されるような宗教のもたらす弊害のみが取りざたされている。このような時代の中にあつて、むしろ我々は宗教の社会的な貢献を強調したい。その中のひとつに人類の地球環境との共生問題がある。この問題には、人類と地球環境との共生における課題だけでなく、様々な国々や民族との共生を含む地球的な問題群が含まれている。また現代文明を象徴する科学技術がもたらしている弊

害の克服もなされなければならない。この意味で、地球環境との共生の課題は、極めて文明的な課題である。これまで私は仏教の自然に対する基本的な考え方、すなわち自然観、環境観、時代観の観点から、また環境問題を解決へと導くために必要な人間の生き方を仏教の価値観や倫理観などに求め、さらに文明的な観点からも、仏教思想の意義を述べてきた。⁽¹⁾ここでは、仏教の環境問題への取り組みを環境教育の視点から述べる。

環境教育への取り組み

仏教はどのように環境問題に関わることができるであろうか。仏教が求める社会変革は急進的なものではなく、漸進的な変革である。これは、「善いこと」というものは、カタツムリの速度で動くものである⁽²⁾というガンジーの有名な言葉があるが、仏教の志向する変革も同様のものである。社会変革を成し遂げるための手段はあくまで人間一人ひとりの変革であり、環境問題にあつて、それは一人ひとりが環境問題を自分の問題として自覚するという教育によってこそ始まる。そこでSGIでは、二〇〇二年南アフリカ共和国ヨハネスブルクで行われた環境開発サミットで「持続可能な開発のための教育の十年」の制定を提案した。⁽³⁾そして、本年二〇〇五年から十年間にわたつて「持続可能な未来」を築くための教育の推進が始まった。その提言で池田SGI会長は、環境教育の重要性に関して以下の三つの視点からの取り組みが大切であることを主張している。

まず、①地球環境問題の現状を知り、学ぶ。すなわち環境に対する理解と認識を深めることである。②持続可能な未来を目指し、生き方を見直す。すなわち倫理観の確立と生き方の見直しである。そして、③問題解決のために、ともに立ち上がり、具体的な行動に踏み出すためのエンパワーメント、すなわち具体的な行動に踏み出すための「勇氣」と「力」を与えることである。これらは環境教育において基本的であるが、しかし最も重要な視点である。これらの三点を仏教の立場から考えてみたい。

(一) 環境に対する理解と認識を深める

まず環境問題に対する理解と認識を深めることであるが、どのような環境問題が起こっているのかは、仏教からのアプローチよりも自然科学や社会科学の分野の探求結果を待つことになる。仏教の視点は、主体と環境の関わりや、環境問題の起こりを独自の視点から提供するものである。ここではその意味で、縁起と仏教の時代観である五濁をとりあげる。⁽⁴⁾

仏教思想の根幹でもある縁起思想では、すべてのものはどこかで連なっているとの認識である。ゆえに自ずと自然や生物の多様性と共生の原理こそ、この世界を維持するための第一の原理になる。このことを最もよく表現しているのが帝釈天の大網の比喩である。仏典〔華嚴經〕に描かれている「帝釈天の大網」⁽⁵⁾には、世界の成り立ちが縁起の視点から適切に表現されている。帝釈天の宮殿に懸かる大網には、無数の結び目があり、そこに宝石（珠）が結び付けられている。そして、それぞれの宝石は他の宝石すべてをきらびやかに映し出し、相互に反映し合っている。これは「一切即一、一即一切」の華嚴經の真髓を表しているが、網の結び目の「宝石」がそれぞれの生物あるいは生物種を表わし、網全体が生態系と解釈することもできる。そうであれば、それぞれの生物の関わりである網の結び目が多く、複雑なほど網は安定する。そしてそれが「宝石」で表現されていることは、それぞれの生物の価値の高低を決めることができないことを表し、しかも互いの姿を映し出していることが、それぞれの生物を尊重し、

それぞれの関わりの深さを示している。しかし、その網の目も一部が切れてくると、その安定性が失われ、大きな穴があくことに繋がる。さらには、ある場所が切れた場合に、次に切れる場所を特定することさえ難しく、また、一部が切れることによって網全体が破れてしまうこともある。それが自然破壊による生態系の崩壊のプロセスでもある。実際、現在起こっている自然破壊による生物種の減少では、少数の生物種が減びることの影響はほとんどないようにみえる。しかしこのことの影響が将来どこに現れるかを予測することはきわめて難しいこと、またそれが原因で生態系全体が崩壊してしまうことすら予測されていることと類似している。このように「縁起」の法門からは、生態系のあり様や、また崩壊へのプロセスさえも読み取ることができる。

次に、時代観としての五濁（煩惱濁、見濁、衆生濁、命濁、劫濁）⁽⁶⁾である。環境問題は、仏教の時代観・文明観というべき「五濁」の「劫濁（時代の濁りを表し、文明が滅びること）」に相当する様相である。五濁は、「劫

濁」、「見濁（思想の濁り）」、「煩惱濁（貪欲など命の濁り）」、「衆生濁（人間全体の濁り）」、「命濁（生命力が弱まり、寿命が短くなること）」からなる。天台の『法華文句』（巻四下）⁽⁷⁾によれば、「煩惱と見とを根本と為す」とあるように、人間の「煩惱濁」と「見濁」から、「衆生濁」、「命濁」に至り、そして時代全体の濁りである「劫濁」が生ずるのである。

すでに現代はさまざまな欲望が渦巻いており、自然破壊を伴う「煩惱濁」によって世界は席卷されている。まさに現代文明は欲望の虜となり、文明自体が暴走しているのである。ガンジーは、「（地球は）すべての人の必要を満たすには十分です。しかし、すべての人の貪欲を満たすには不十分なのです」⁽⁸⁾と、指摘したように、人間の貪欲さによって地球は破壊され尽くしてしまう可能性がある。もう一つの原因は、「我」への執着、それは物質的な執着やそれによって満足が得られるとする悪見への執着であり、「見濁」である。ガンジーは、機械文明を否定したが、それは「わたしが反対しているのは、機械への『狂信』にたいしてです」⁽⁹⁾と述べて

いるように、機械そのものを否定したのではなく、むしろ機械への執着であり、それによって満足が得られるとする悪見を否定したものである。ガンジーの文明批判は、仏教の文明批判と全く同様のものであることを示している。

（二）生き方を見直す

環境問題の原因や環境に対する理解や認識が深められたならば、次の段階は自身の生き方を見直し、自然や他の人間、またこれから生まれてくる未来世代の人々への倫理意識や責任感を涵養する必要がある。生命の原理的平等性は、仏教倫理のベースである。⁽¹⁰⁾

これは一念三千論の「五陰」世間における生命の把握に基づく。個々の生命体が現象として現れてくるときの違いは、この「五陰（色、受、想、行、識）」の和合の仕方が異なるだけで、本質的な違いはないというのが、仏教の生命認識だからである。環境問題における生物に関わる問題を考える際に、人間としてどのような行動規範や倫理規範を考えるか、そのときに重要な視点

を仏教における縁起と中道の智慧、および中道の倫理規範⁽¹¹⁾に求めてみたい。

縁起の智慧において重要なことは、関わりの分断である。この意味で重要なことは、生態系を破壊することと、生物種の絶滅である。これは現在生きているそれぞれの生物の関わりを断つという意味と、これから生まれてくる可能性を断つとの二つの意味において、禁じる必要がある。したがって、生態系の回復が出来なくなるような破壊や、その種が生まれることを断つという意味で生物種の絶滅は、仏教の立場から最も禁じるべきことになる。

中道の智慧は、野生生物の捕獲や森林の伐採と、それらが現地の人々の生活を支える手段であることを考え合わせる際に、重要な視点を提供してくれる。仏教における中道の智慧では、どちらも決定的に否定もせず、またどちらも決定的に肯定するでもない、すなわちどちらの価値も認め、なおかつ偏らず、調和を求めるところに特徴がある。野生生物の捕獲、森林伐採と現地の人々の利益を考える時、現地の人々の利益を

否定するのではなく、また生態系の破壊を肯定するのでもない、現地の人々の利益を確保しながら、生態系の回復力も破壊しない。すなわち生態系の回復力を破壊しない程度の野生生物の捕獲や森林伐採であれば、許される。これが中道の智慧に基づく仏教の倫理である。そのためには、生態系の監視、管理が重要な意味を持つてくるだろう。

次にこうした仏教における智慧や倫理を行動規範や倫理規範まで高める必要がある。そこに持戒の意義がある。⁽¹²⁾ 仏教には様々な戒があるが、ここでは環境問題の観点から、不殺生戒と不偷盗戒を取り上げる。不殺生戒においては、生物を殺すことは悪であり、また不偷盗戒においては、生態系から資源や生息地を奪うこと、開発途上国から搾取により資源を奪うことは悪であることになり、これらを禁ずることになる。ただし、仏教における戒は、絶対的なものではない。梵網經の第一重戒「快意殺生戒」⁽¹³⁾には、「一切の命有る者をば故らに殺すことを得ざれ」、また梵網經第二重戒「劫盗人物戒」⁽¹⁴⁾には、「一切の財物、一針一草をも故らに盗むこ

とを得ざれ」とあるが、いずれの戒にも「故（こと）にらに」とあるように、理由無くして、あるいは故意に行つてはならない、と禁じているのである。したがって、理由により認めることもある。たとえば、これは、生きるため、最低限生きていく上で必要なことは柔軟に対処できることを示している。ゆえに、原則として、生きる上で必要なこと以外において、不殺生戒と不偷盗戒の戒を持つことが仏教における行動規範であり、縁起の智慧や中道の智慧に基づいた規範が仏教における倫理規範になろう。付け加えて言うならば、仏教における不殺生戒および不偷盗戒は、ガンジの「十一カ条の戒律」⁽¹⁵⁾の中の、アヒンサー（非暴力）、およびアスヴァッド（嗜欲抑制）とアステーヤ（不盗）と全く同様の意味を持ったものと言うことができるだろう。

(三) 行動に踏み出す

最後に重要なことは、環境問題の解決に向かつて、具体的な行動に踏み出すための「勇気」と「力」を与えることである。そして、倫理を「誓い」として高め、

行動自体に「使命」と「喜び」を伴うことが必要になる。この点で重要なことは、環境問題の解決に向かつて行動することが、仏教において究極的な実践である菩薩道にそのまま合致していることである。そうであれば、前に述べたように、仏教にとって必然的な実践とならないし、また究極的な実践であるからこそ、「勇気」や「力」が与えられ、それを実践する「誓い」と、さらには「使命」と「喜び」が伴うことになる。

そこで環境問題への実践を菩薩道の上から見てみよう。菩薩の基本的精神は、法華經『法師品第十』の「弘教の三軌」⁽¹⁶⁾の「如来の衣（忍辱）」、「如来の座（空観）」、「如来の室（慈悲）」に表されている。ここで、「忍辱」とは煩惱との不断の対決をし、不惜身命（身命を惜しまない）の修行を實踐し、そこにおいてはいかなる恥にも堪え忍ぶこと、「空観」とは、「一切法空」の縁起思想の境地に立つ智慧のことであり、先に述べてきた通りである。また「慈悲」とは、あらゆる生命の苦悩を平等に抜きとることである。

環境問題の解決のために行動を起こしたとしても、

容易に解決への糸口を見出すことはできないであろう。ゆえに、そこでは多くの忍耐が必要になる。そして欲望を制御し、適正なものに保つ上でも、忍耐が求められる。この忍耐を通して、自身のライフスタイルを革新すること、あるいは倫理的な生き方が可能になる。慈悲において重要なことは、慈悲はあらゆる人間、動物、植物に対して、さらに善悪を選ばず及ぶということである。これは、釈尊が「目に見えるものでも、見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれよう」と欲するものでも、一切の生きとし生けるものは、幸せであれ⁽¹⁷⁾と説いた通りである。なかでも「見えないもの」、「遠くに住むもの」、「これから生まれよう」と欲するもの」にまで慈悲の対象が広がっている点は、重要である。

以上のような仏教倫理をベースにした環境教育の推進は、ホフライトネル・ローマクラブ名誉会長の指摘されるように、「環境教育を通して、私たち個々人の自然に対する態度が変革され、人間と自然との調和ある

関係が確立される⁽¹⁸⁾と述べられている通りである。

注

- (1) 拙論「環境思想への仏教の寄与」『東洋学術研究』、第三十六巻第二号、五七—七八、一九九七。拙論「森林破壊と仏教の文明論」『東洋学術研究』、第四十三巻第二号、七九—九四、二〇〇四。
- (2) N・ラダクリシュナン『ガンジー・キング・イケター非暴力と対話の系譜』（栗原淑江訳）、第三文明社、二〇〇二。
- (3) 池田大作「環境開発サミットへの提言・地球革命への挑戦——持続可能な未来のための教育」、聖教新聞、二〇〇二年八月二十六日。
- (4) 前出拙論「環境思想への仏教の寄与」。
- (5) 『華嚴經探玄記』大正蔵三十五巻、一一五—一一七。
- (6) 『法華文句』（巻四下）大正蔵三十四巻、五二—五三。
- (7) 前出『法華文句』（巻四下）。
- (8) 前出N・ラダクリシュナン（二〇〇二）。
- (9) ガンディー「わが非暴力の闘い」森本達雄訳、第三文明社、二〇〇一。
- (10) 前出拙論「環境思想への仏教の寄与」。
- (11) 拙論「大乘仏教における環境倫理——持戒と智慧の意義」『東洋学術研究』、第四十一巻第二号、一三三—一五四、二〇〇一。

- (12) 同論文。
- (13) 『梵網經』巻下、國譯一切經、律部十二巻、三三六ページ、大野法道・加藤觀澄訳、大東出版社。
- (14) 『梵網經』同前。
- (15) 前出N・ラダクリシュナン（二〇〇二）。
- (16) 拙論「大乘仏教と環境倫理——唯識思想を中心として」『東洋学術研究』、第三十九巻第二号、一一三—一二七、二〇〇〇。
- (17) 「スッタニパータ」『ブッダのことば』中村元訳、岩波書店、一九五八。
- (18) ホフライトネル・池田大作、対談「見つめあう西と東——人間革命と地球革命」第三文明、二〇〇五年一月、五三—六三。

（やまもと しゅういち／創価大学工学部教授、
東洋哲学研究所主任研究員）